

程度を表す副詞の意味分析

—とても・大変・ずいぶん・だいぶ・かなり・よく・本当に—

日本語教育領域 増田彩花

キーワード：副詞、とても、大変、ずいぶん、だいぶ、かなり、よく、本当に、共起関係、
程度の大きさ、世代差

I 論文の目的

本論文の目的は、程度を表す副詞のうち「とても」「大変」「ずいぶん」「だいぶ」「かなり」「よく」「本当に」の7語について、その意味や用法の差異を考察し、日本語母語話者の使用実態を明らかにすることである。

日本語教育において副詞は、学習者、教師双方にとって困難を伴うことの多い学習項目であり、そのほかの学習項目に比べて扱いが軽くなる傾向にある。しかし、表現効果の大きい副詞の運用力を身に付けることは、学習者の日本語能力の伸長に繋がるといえる。日本語学習者への効果的な語彙指導を目指すために、日本語学習用教科書でも初級から扱われることの多い程度を表す副詞を取り上げて意味分析を行う。

II 論文の構成

論文の構成は以下の通りである。

1. 研究の目的
2. 研究の焦点
3. 先行研究
 - 3.1 辞書の記述
 - 3.2 森田(1977)(1980)
 - 3.3 工藤(1983)
 - 3.4 森山(1986)
 - 3.5 佐野(1998)
 - 3.6 佐野(2006)
 - 3.7 川端(1999)
4. 内省による分析
 - 4.1 形容詞との共起関係
 - 4.1.1 感情形容詞

- 4.1.2 属性形容詞
 - 4.1.2-1 広汎的なものごとの属性
 - 4.1.2-2 ものに関する属性
 - 4.1.2-3 ひとに関する属性
 - 4.1.2-4 ことに関する属性
- 4.1.3 程度の著しさ・わずかさを含む形容詞
- 4.1.4 形容詞に関するまとめ
- 4.2 動詞との共起関係
 - 4.2.1 静態動詞
 - 4.2.2 内的情態動詞
 - 4.2.2-1 思考動詞
 - 4.2.2-2 感情動詞
 - 4.2.2-3 感覚動詞
 - 4.2.2-4 知覚動詞
 - 4.2.3 外的運動動詞
 - 4.2.3-1 主体動作・客体変化動詞
 - 4.2.3-2 主体変化動詞
 - 4.2.3-3 主体動作動詞
 - 4.2.4 動詞に関するまとめ
- 4.3 内省による分析のまとめ
- 5. コーパス分析
 - 5.1 「とても」と共起する場合
 - 5.1.1 形容詞
 - 5.1.2 動詞
 - 5.2 「大変」と共起する場合
 - 5.2.1 形容詞
 - 5.2.2 動詞
 - 5.3 「ずいぶん」と共起する場合
 - 5.3.1 形容詞
 - 5.3.2 動詞
 - 5.4 「だいぶ」と共起する場合
 - 5.4.1 形容詞
 - 5.4.2 動詞
 - 5.5 「かなり」と共起する場合
 - 5.5.1 形容詞
 - 5.5.2 動詞

- 5.6 「よく」と共起する場合
- 5.7 「本当に」と共起する場合
 - 5.7.1 形容詞
 - 5.7.2 動詞
- 5.8 コーパス分析のまとめ
- 6. アンケート調査
 - 6.1 日本語母語話者の使用実態に関する分析
 - 6.1.1 形容詞と共起する場合
 - 6.1.2 動詞と共起する場合
 - 6.2 アンケート調査のまとめ
- 7. まとめ
- 8. おわりに

III 論文の概要

2章では、日本語教育の初級レベルでどのような程度副詞が提出されるのか、日本語学習用初級教科書10冊を調査した。そのなかから、より多くの教科書で扱われている「とても」「大変」「ずいぶん」「だいぶ」「かなり」「よく」「本当に」を分析対象とした。

3章では、分析対象である副詞に関する辞書の記述、先行研究について述べた。ここで、これらの副詞、特に「ずいぶん」「だいぶ」「かなり」の使用条件や表す程度の大きさについて、先行研究と筆者の言語直感とで相違があることが判明した。副詞の使用に関して世代差が存在する可能性を考え、それが明らかになるよう分析を行うこととした。

4章では、「とても」「大変」「ずいぶん」「だいぶ」「かなり」「よく」「本当に」の7語について、形容詞・動詞と共起させた肯定・平叙の例文を作成し、内省により分析を行った。そこから、共起する形容詞・動詞、その意味に関して、次のような特徴が明らかになった。「とても」は、話し手の主観的な感覚に基づき、程度や客体の量のはなはだしさ、極限状態を表す。プラス・マイナス評価に関係なく、程度性をもつ形容詞全般、状態性の動詞、進展性に限界のない変化動詞や無意志的動作動詞と共起しやすい。「大変」は、改まり表現のなかで程度のはなはだしさ、極限状態を表す。プラス・マイナス評価に関係なく、程度性をもつ形容詞全般、状態性の動詞と共起し、動作性の動詞とは共起しにくい。「ずいぶん」は、話し手の実感に基づき、予想よりも程度や量のはなはだしいさまを表し、それに対する主観的な驚き、意外感、不快感の暗示が伴う。話し手の主観的感情を表す感情形容詞以外の程度性をもつ形容詞全般と状態性・動作性の動詞と共起する。「だいぶ」は、進展的な事態について、その過程にある程度の大きさを、ほかの時点と比較して上回っていると判断する特徴があり、そこから程度や量が極限状態には至らないが平均以上であるさまを表す。主観的な感情を表す感情形容詞を除く、程度性をもつ形容詞、状態性・動作性の動詞と共起するが、プラス評価の語とは共起しにくい。「かなり」は、極限状態には至らないが、

それにごく近い程度や量のはなはだしさを客観的に表す。プラス・マイナス評価に関係なく、程度性をもつ形容詞、状態性・動作性の動詞全般と共起可能である。「よく」は、行為や状態の程度が十分であるさま、もしくはその行為がたくさんなされているさまを表す。形容詞とは共起せず、状態性の動詞、動作性の動詞と共起する。動作のなかになんらかの達成すべき目的や満たすべき基準が設定できるような動詞の場合、「十分に」の意味を表し、なんらかの基準を満たすことを意味に含んでおらず、繰り返し行える動詞の場合に、「たくさん」の意味を表す。マイナス評価をもつ動作、程度性・進展性をもたない動作・変化とは共起しない。「本当に」は、話し手の直接体験からの実感に基づいて程度が極限状態であることを強調する。程度性をもつ形容詞全般、状態性の動詞と共起する。

5章では、『KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」中納言』を用いて、「とても」「大変」「ずいぶん」「だいぶ」「かなり」「よく」「本当に」がどのような形容詞・動詞に係っているのか、使用例を抜き出して分析を行った。そこから、それぞれの副詞がもつ程度以外の用法や、共起する形容詞、動詞の特徴について明らかになった。「とても」には不可能の用法があり、後ろに打消や否定形式を伴って心理的または能力的な抵抗により事態を認識すること、行為をすることが不可能であることを表す。話し手の主観に基づいて否定を強調するはたらきがあり、否定形式を伴うほとんどの動詞と共起可能である。動作性の動詞と共起しにくい「とても」「大変」は、動詞に「—やすい／—にくい／—つらい」といった形式形容詞を伴うことがほとんどである。「だいぶ」は、「—になる」という状態変化の動詞を伴う形での形容詞との共起、前文脈に「—より」「—と／に比べると／て／れば」という比較表現を伴っての共起が多い。「よく」には、一回の動作が長期的に頻繁に行われることを表す頻度の用法があり、繰り返し行うことのできる動詞であれば、動作性でも状態性でも共起可能である。また、なんらかの行為に対する話し手の肯定的、あるいは否定的な評価を表す評価の用法があり、話し手がその事態についてなんらかの評価を述べようとするならば、多くの動詞が評価の用法として共起可能である。「ね」「よ」「ものだ」などの文末表現を伴うこと、肯定的評価ではタ形・テクレル形、否定的評価では可能形をとることが多い。評価の用法と類似するものとして、「よく＋終止形（＋終助詞）」の形で軽い否定的評価を述べるもの、「望ましい、上手い」といった「よい」がもつ本来的な意味で評価を述べるものがある。「本当に」には、話し手の否定的前提、未体験事態、真偽不明事態に基づく事実認定の用法があり、疑問、否定、仮定、推量、伝聞などの表現形式を伴うことが多い。このような条件にない場合に程度強調の意味を表す。

6章では、ここまでの分析を踏まえてふたつの仮説を立て、高校生とその保護者を対象にアンケート調査を行った。仮説とは、(1)感情形容詞との共起制限について、特に「だいぶ」とマイナス感情の形容詞の場合、話し手の主観的感情は表せないという使用条件が若い世代では薄れている、(2)「ずいぶん」「だいぶ」「かなり」の示す程度の捉え方が世代によって異なり、若い世代ほど「かなり」の示す程度を大きく認識している、というものである。10代144名と30代から60代46名の回答を分析した結果、仮説に対して次のこと

が明らかになった。仮説(1)について、「ずいぶん」に関しては、話し手の主観的感情を表すことができないが、第三者の感情を表す場合は適格となるという条件が、若年層でも中高年層でも機能している。一方「だいぶ」に関しては、若年層ではそのような条件は薄れており、約8割がプラス感情・マイナス感情に関わらず「だいぶ」と話し手の主観的感情が共起できるとしている。若年層では感情形容詞に限らず、「だいぶ」の許容度が中高年層よりも高い。仮説(2)について、「ずいぶん」「だいぶ」と「かなり」とでは、表す程度の大きさの認識に明らかな違いがある。それぞれの程度を5段階で表してもらうと、若年層でも中高年層でも大多数が「ずいぶん」「だいぶ」は「4か3」、「かなり」は「5か4」を選択しており、「ずいぶん」「だいぶ」が「かなり」を超えて大きな程度を表すということはほとんどない。「かなり」は、本来の持っていた程度よりも大きな程度へと移行し終えて、5段階中「5から4」の程度にほぼ定着してきているといえる。

以上、程度を表す副詞「とても」「大変」「ずいぶん」「だいぶ」「かなり」「よく」「本当に」の意味分析を行い、用法や意味の差異、使用実態について考察した。日本語教育においては、学習者が運用するにあたり不都合が生じる可能性を減らすため、類義語間でこのような差異を教師が把握することが指導の上で役立つと考えられる。この意味分析を効果的な副詞の語彙指導へと生かすためには、さらに日本語学習用教科書の分析や、学習者のレベルに合ったわかりやすい情報提示の仕方を考える必要がある。この点については次の機会に譲りたい。

参考文献

川端元子 (1999) 「講義程度副詞の程度修飾機能 — 「本当に」「実に」を例に —」『日本語教育』101 日本語教育学会 pp.51-59

工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 pp.176-198

佐野由紀子 (1998) 「程度限定における「主観性」について」『現代日本語研究』5 大阪大学 pp.111-120

————— (2006) 「あり方に関わる副詞としての「よく」について」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 1 形態・叙述内容編』くろしお出版 pp.157-177

森田良行 (1977) 『基礎日本語—意味と使い方—』角川書店

————— (1980) 『基礎日本語 2—意味と使い方—』角川書店

参考辞書

金田一京助 (1997) 『新明解国語辞典 第五版』三省堂

日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001-2002) 『日本国語大辞典 第二版』第三、七、八、九、十二、十三巻 小学館

調査資料

『A COURSE IN MODERN JAPANESE VOLUME ONE TWO』(2002) 名古屋大学日

本語教育研究グループ

『ICUの日本語 JAPANESE FOR COLLEGE STUDENTS Basic vol.1-3』(1996) 国際
基督教大学

『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE I・III』(1995-1997) AJALT

『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE vol.1-3』(1992) つくばランゲージグルー
プ

『語学留学生のための日本語 I』(2002) 凡人社

『初級日本語上下』(2010) 東京外国語大学留学生日本語教育センター

『初級日本語げんき I II』(1999) The Japan Times

『新日本語の基礎 I II』(1993) スリーエーネットワーク

『新文化初級日本語 I II』(2000) 文化外国語専門学校

『みんなの日本語初級 I II』(1998) スリーエーネットワーク

KOTONOHA「現代書き言葉均衡コーパス」コーパス検索アプリケーション中納言

〈 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/login.jsessionid=75C354F3D3CBD35B6531278E747747AE> 〉